



## 職業能力開発と雇用の間に

ニート・フリーター問題は、若年者雇用対策やここ数年の景気の回復を受け過去のものとなった感がある。しかし、都会ではネットカフェをねぐらにし、派遣などの短期型雇用職場を渡り歩く若者を「ネットカフェ難民」や「ワーキングプア」などと称して一時期マスコミで取り上げられていた。

景気の回復によって若者雇用問題は収束したのだろうか。「就職氷河期」に安定雇用を得られなかった若者たちは、新規学卒者を前提とする雇用慣行のため、思うような安定的雇用が得られずに確実に年齢を重ねていっている。また、その親たちも（これは団塊世代が多いのであるが、ある調査によると団塊世代の子どもの約3割は派遣社員等の非正規労働者やフリーター、あるいはニートであるという）年金生活に入ったりして、必ずしも子どもたちに十分なサポートをすることが難しい状況になりつつあるのではないかな。

今後、景気の後退のみならず、親が亡くなったり病気をしたりすることで、その庇護<sup>ひご</sup>にある子どもは簡単に貧困層へと駒を進めてしまう。

ニート・フリーター問題は最早終息したのではなく、次なる章へ進む扉の前に立っているかのようである。

こうした若者雇用問題を解決することなしに時間だけが経過するということは、若年→中年→高年へと年齢を重ねた結果、やがて貧困層の大きな固まり・層が形成され、先の見えない不安に駆られ、さまざまな社会問題を引き起こすことになりかねない。

そのためには、教育機関と支援機関の調整や連携がますます必要であるし、今年度創設されたジョブカードを使って自分のキャリアの棚卸しをすることも有効な手法であろう。

最近の若者の中には、専門的な技能・技術もさることながら、基礎学力やコンピテンシーといったものを教育あるいは訓練する必要のある若者も少数な

がら存在する。

学校と雇用の境界をどう位置づけて埋めるか、これから新しい職業訓練システムも考えていく必要があるかもしれないが、学校を出てニートやフリーターになるより、職業訓練を受けて就職をすることが重要であることを理解させることが重要であろう。

若者に希薄な職業意識や職業知識について職業能力開発校を利用して体験していくことも可能である。その一例として本校を利用して「現代の名工」がその卓越した溶接技能を工業高校の先生方に講習し、高校生にあたかも『溶接甲子園大会』のように夏休みの1日を使い溶接コンクールを実施している。まず工業高校の先生方に、日ごろ目に触れる機会の少ない匠の技を体験していただくことで職業や技能の理解に拍車をかけることができるようだ。

また、大分大学教育学部が行うかなかけの動作研究に協力したり、ミクロン単位の削りくず・「削り華」の薄さを競う「削ろう会」というイベントを行ったりして技能具現化の試みも実施している。

職業訓練や雇用問題はこれまでどちらかというところと一般に馴染みが薄かった分野だけに、こうした研究者や現場で指導する人々が垣根を越えて集い、考える場ができれば諸問題の解決に向けた第1歩となるのではないだろうか。

### あしがり ひろみ

#### 略歴

- 1972年 大分県採用 佐伯専修職業訓練校「構造物鐵工科」職業訓練指導員
- 1981年 中津専修職業訓練校「溶接科・モジュール訓練科」職業訓練指導員
- 1984年 商工労働部職業訓練課主任
- 1986年 大分高等技術専門校「メカトロニクス科」職業訓練指導員
- 2001年 同校 訓練課長
- 2003年 佐伯高等技術専門校校長
- 2005年 商工労働部雇用・人材育成対策室長
- 2007年 大分高等技術専門校校長  
現在に至る